百合子賞　正賞　受賞作品

空のうた

郡山市立行健中学校
紅林愛美

空のうた

ふと空を見あげると
灰色の空から雪が降ってきた
次から次からひたすらに
真っ白い雪を生み出すように

雪の季節が過ぎて
浅い春の空は
透き通るかなしいような色をしていた
旅立っていくあの人との別れを
私の心に映すように

春、空は明るく
草は萌え花々が咲きほこる
桜の花の間から見上げる空は
やわらかな光を私にそそいでくれた

夏の空は輝き
蟬たちの声が沸き上がる
遠くで子供達の遊ぶ声が聞こえる
夏の空のなんという鮮やかな青

蛙たちの見事な合唱が
しだいに虫のオーケストラに移り変わり
木々は葉を落とす
空は高かった。とても。
心の中で空に呼びかけると
はるか遠くから金色の光で応えてくれた
気が付けばいつも、空の美しい歌の数々が
私の心に響いていた。

空のもとで

空のもとで私達は生きる。
私達はつながっている。

生まれた国が違おうと
同じ空のもと
どんなに遠くても世界のはてまで
空は私達をつないでいる。

今日、私達はいつものように
食べて、笑って、眠ってすごすのだった。

同じ空のもとで
響き渡る爆音
親を亡くした子供の
泣き叫ぶ声がこだまする
帰る場所を失った人々の悲しい列が続く。

今日、私達は平和だ。
それは本当の平和なのだろうか。
私は考えたい。
この空のもと生きる
全ての人の平和を。

夕焼け

生命(いのち)と生命(いのち)がぶつかり合っているような
真っ赤な、大きい夕焼け

母は幼い頃
その壮大な美しさに
息をのみ、じっと
夕陽が沈むまで立ちつくして
眺めていたことがあったそうだ

祖母は夕飯の支度をしながら
おっかないような夕焼けだ。と言った。
空襲という祖母の悲しい記憶を呼び起こす

夕焼けは美しいはずなのに
おそれる人もいるのだ。
戦争は無くなっていないのだ。

夕焼けの赤い光が照らすのは
人々の笑顔であってほしいと願う。
生命(いのち)と生命(いのち)がぶつかり合っているような
真っ赤な大きい夕焼けの中
私は立ちつくし見つめる
夕焼けの中にひそむ燃えた物語を。

星の物語

夏の風は、青い草の匂い
夜空を見上げると
星が輝いている
星々を指でたどってみる

はくちょう座、こと座、わし座
夏の大三角形だ
北斗七星にカシオペア
私の星座のさそり座も！
ここからは見えないけど
天の川はどのように輝いているのだろう
織姫と彦星がまた会える日はいつだろう

輝く大きく見える星も
遠くて暗く見える星も
大切な尊い星々に思える

地球という星に立ち
私は今、星空を見上げている。

虹

雨上がりの空に虹が現れると
心の中に光が差しこんだように感じる
自然とみんなを笑顔にさせる
不思議な七色の光だ。

雨がやがて虹になるように
悲しみの涙で濡れた頬が
乾いて涙が天に昇る時
心には希望という虹が
現れるのかもしれない

私からあなたへ
あなたからだれかへ
感謝の虹がつないでくれますように
心の中でそっと祈りながら

今も、この世界で
だれかの瞳に虹が映る。
そして心に希望の空のうたがきこえる。

（指導教諭／二　瓶　英　俊）

《作品の意図》

ロシアのウクライナ侵略やミャンマーでのクーデターなど戦争のニュースが連日のように報道されています。中学生最後の夏、私は「平和とは何か」と考えを深めたいと思いました。平和と私達をつないでいる空への想いを基に「空のうた」という5編からなる詩集を作りました。

《作品の寸評》

「空のうた」の、雪の季節から始めて早春、春の光、夏空の青、高い秋空に呼びかけ、四季の空からの呼応を歌として受けとるという表現には個性があった。「空のもとで」は、避難して行くウクライナの子どもの映像から喚起された感情を、抑えながらも読点を使い断定の強いリズムで表現できた。「夕焼け」は、導入が〈いのちといのちがぶつかり合っているような／真っ赤な、大きい夕焼け〉と、どきりとさせる。祖母、母、自分それぞれの夕焼けが存在し、戦争は終わっていないという気付きは大人の感性に近い。「星の物語」は、五篇の中では強い主張はない。地球という一つの星から夏空を見上げる様子を描いている。しかし、言外には世界中の人々が同じ空のもとで幸せであるべきだという主張が隠されている。「虹」は、雨上がり虹が現れるという表現は平凡な表現であるが、世界中の人々に希望の歌であって欲しいとの願いは作者の優しさの表出であろう。その虹は、生きていることへの感謝と、いのちが続いて行くことへの祈りでもあるのだ。秀逸な表現である。

（審査員／高　橋　静　恵）